

---

# クリスマスの魔法

碧

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クリスマスの魔法

### 【Zコード】

Z79480

### 【作者名】

碧

### 【あらすじ】

クリスマスが、待ち遠しいアンバー。

ウキウキ気分で友達のアシュレイとrianと一緒に、町をぶらついていたとき、見慣れぬ小さな雑貨屋を見つけます。外見はとてもぼろくて古い感じだけれど、ショーウィンドウから見える

小物やぬいぐるみ、飾りや時計、靴や本などはとっても可愛くて綺麗な物ばかり。

興味を抱いた3人はお店の中に入ることに。

そこで出会ったスノードームにアンバーは一目ぼれしてしまい、早速買って帰りました。

その日から不思議なことがスノードームの中で起き始めました。なんと、スノードームの雪の中に毎夜言葉が浮かび上がってくるのです。

最初は半信半疑だったものの、その言葉の言つとおりになると、どんどん色々なことが起こりはじめます。

そしてついにアンバー、アシュレイ、リアンはスノードームによつて、

サンタクロースがいるというアラスカの森の中に飛ばされます。そこで出会った、本物のサンタクロース。

でもサンタクロースはひとつ悩みを抱えていました。

その悩みを解決してくれないかとサンタクロースに頼み込まれ、3人は引き受けることに。

さて、3人はどうなるのでしょうか？

そしてサンタクロースの悩みとは？

無事にクリスマスはやつてくるのでしょうか？

## 第一章 いつも三人組み 『～～』（前書き）

はじめまして、碧といいます

今回は、『クリスマスの魔法』という、クリスマスをテーマとした物語を

書こうと思つてこます。季節的にも、気分的にも。

よひしければこの物語に付合つてください。

## 第一章 いつもの三人組み

『～1～』

### 第一章 いつもの三人組み 『～1～』

12月19日、ニューヨーク。

高層ビルが立ち並ぶ大都会に、真っ白で夢の雪がシンシンとふっていた。

この年に入つて初めての雪が音も無くゆっくりと、ニューヨークを真っ白に染めている最中、アンバー・ウィルソンは自宅アパートの窓辺にひじをついて、ラジオから聞こえてくる天気予報に耳をすましていた。

「さて次はニューヨークの天気予報です。

ニューヨークでは初雪がふり始めたところで、この雪は1月初旬までふることでしょう。

先週は雷雨などが各地で起こりましたが、今週以降天気は落ち着くもようです。

ですが気温はいまだ下がり続ける一方なので、お出かけの際にはコートなどで暖を取るよう心がけてください。

さて次はサンフランシスコの天気予報です」

そこまで聞いてアンバーはラジオのスイッチを消した。

部屋の中が静かになつて、耳をすませば初雪がふつてくる音が聞こえてきそうな気がする。

ラジオではこの雪は一月初旬までふり続けるって言っていた。

ということは今年のクリスマス、2年ぶりのホワイトクリスマスになるつてことだ！

「イヤツタアー！」

思つたより大きな声で、口を空に突き出して叫んだ。

「近所さんにはうるさいかもしれないけど、正直どうでもいい。なんたつて今年のクリスマスには、真っ白でロマンチックな雪がふるのだから。それだけで十分だ。」

去年なんて雪がふったのはクリスマスが終わつた次の週。

灰色のアスファルトむき出しのクリスマスなんて、サラあばあちゃんが作る豆スープと同じくらい最悪。でも今年は大丈夫。真っ白な、ニューヨークのクリスマスになるんだから。

雪がふればショッピングモールのクリスマスの飾りつけは一段と華やかさがアップするし、

学校の男子の大半がかっこよく見れる気がするし（本当に少しね）、パパのギャグにも一応面白味が感じれるようになる。

雪つてだけで私の周りの世界はキラキラって輝きだす気がする。

クリスマスに合わせて換えた赤色のカーテンの向こうにはアンバーが望む最高の景色が広がつていこうとしていた。部屋の中も、クリスマスを今か今かと待ち構えている。

絨毯は赤色と緑色のものにして、暖炉の代わりのストーブには、「ジョンダのショッピングモール」で買つてきた、色鮮やかな靴下がぶら下がつている。

扉の一つ一つにはリースをぶら下げて、リビングの机にはクリスマスローズが飾つてある。

ペットの猫のルージイの毛布も、ちびっ子サンタクロースの模様がついているものに変えてある。

アンバーと弟のジェイクのベットカバーももちろんトナカイの絵柄、何から今までクリスマス仕様だ。

そして何と言つたつて主役は、貯めに貯めて買つた大きなクリスマスツリー。

天井にくつつきわづなくらい大きくて、幹の部分や枝の部分が腐つ

ているところなどが無い、完璧なクリスマスツリーだ。

それは居間の右上に置いてあって、ストーブの明かりで綺麗な飾り達がチカチカと瞬いている。

赤と白の縞々の棒キヤンティーに、ちびサンタクロース、クッキーマンや綺麗な色のボール、

可愛らしい顔の天使や、金色、銀色などのモールで飾り付けられている。

てつべんには、これまた色々なショッピングモールや雑貨店を見て回って選びに選んだお星様。

金色で大きくて、とても目立つ星だ。目立ちすぎてせっかくの他の飾りが色あせて見えるくらい。

思わず感嘆のため息がもれてしまふくらい素敵すぎて、立派なクリスマスツリーになった。

今年はいつも以上にウイルソン家がクリスマスに力を入れる理由があつた。

何かというと、今まで入院していたアンバーの母、エリーゼが退院して家に帰つてくるのが、

エリスマス・イヴだからなのだ。  
エリーゼは産まれた時からもつてている心臓の持病かなにかで入退院を繰り返していたけれど、

今回は今までの状況よりはるかに悪いらしく、過去最長の2年間ケイトウエディン病院に入院していた。

エリーゼがないと、料理とか洗濯とか家事全般はすぐ大変だったし、第一とつまらなかつた。エリーゼは優しいし、それプラスとても面白い。パパなんかよりずっと。  
つていうよりか、エリーゼがパパのつまらないギャグに対するツッコミが絶妙に笑えた。

エリーゼはアンバー やジョイクの本当の母親じゃない。いわゆる継母。

でも、シンデレラの継母みたいに意地悪じゃないし、ガリガリの不

気味な感じでもない。

どつちかつて言つと「ロンロロン」してゐる。

だからと言つて自分で自分の体重が支えられないくらいの「トブジヤ」がない。

ほど良い「テブつて言つんだらうか、まあそんな感じ。

ぱつぱりで顔が少し赤くて、いつもブーツを履いている。冬でも夏でも関係なく。

エリーゼの言うことだと、ブーツについてのは全人類にとつて最高の履物らしい。

私もブーツは好きだし、冬はこれでもかつていつも毎日ブーツばかり履いているけど、

エリーゼみたいに夏はショートブーツを履くんだったといつもブーツへの愛は持ち合わせていない。

最初に言つておぐが、エリーゼが本当の母親じゃないからって、私達がむくれて話もしないとは思わないで頂きたい。実の母親が死んだのは、私が3歳のとき。

わたしはまだオムツをはいてる幼児だったし、ジェイクなんて産まれてまもない赤ん坊だった。

だから母親の顔だつて覚えてないし、思い出もこれといつてないわけ。

ほんやりと輪郭だけなら少しばし思い出せるのだけれど。

それから少したつてからパパは、同じ空港会社で働いていたエリーゼと結婚した。

パパが言つには、本当のママと出会つたときと同じときめきを感じたらしい。

ということで、本当のママよりエリーゼと過ごした時間の方が長いから、エリーゼの方が母親つて感じ。

だから本当の母親がいないつてことに不満を感じたこともないし、家出したいって思ったこともない。

本当のパパとママがそろっている家庭と大して変わらない気がする。

私としては。

そんな大好きなエリーゼが帰つてくるのだから、クリスマスは最高のものにしなければならない。

飾りつけはもちろん、プレゼントの中身だって天氣だって、どうにかしないといけないわけである。

家の中の飾りつけはほとんどパーフェクトに近い。

クリスマスカラーである赤と緑にそろえてあるし、所々にある置物や壁掛けも可愛いものにしている。

トイレスの便座カバーもマットも雪だるま模様だし、お風呂には天使の形のアロマキャンドル。

きっとこれをみたらエリーゼはびっくりして泣き出しが、笑い出すと思う。

エリーゼの感情表現はそのどちらかしかないんだもの。

だから私達が喧嘩とかをすると怒らず、自分が泣いて私達を反省させるつて方法をずっと貫いてる。

見た目的には以外だが、結構頭で考えている人だ。

その証拠に、エリーゼに分からぬなぞなぞは一つも無い。

子供相手だからって手加減しないから、トランプのダウトやオセロ、じゃんけんや引っ掛け問題で楽しんだ記憶はゼロと言つていいほど、全く無い。

それでも、一生懸命遊んでくれるところや、友達と喧嘩したり男子にからかわれて泣いている時、

優しく抱きしめてくれるエリーゼが大好きだった。

エリーゼが帰つてきたら、一番最初にギュッと抱きしめてもらおう。それから、チキンやケーキを食べながらおしゃべりを飽きるほどして、久しぶりに絵本でも読んでもらおつかな、「子猫のジャン君」とか「キミのしつぽどこへ行く」とか。

ジェイクは口癖の、「ガキじゃないんだから」を連発するだらうけれど、

心の中ではかなり嬉しがつてゐると思う。意外と甘えんぼだしね。

そんなクリスマス・イヴの光景を想像しただけで、本当にクリスマスが待ち遠しくなる。

早く来てくれないかな、12月24日と25日、聖なる夜が。

エリーゼと久しぶりにゆっくりと過ごしたいっていうのもあるし、もうひとつ個人的な期待も、クリスマスには待ち構えているんだよね。

パパにもジョイクにも話していないし、まあエリーゼには帰ってきたらすぐに話すつもり。

やつぱり恥ずかしいけど、エリーゼは女性だし自慢したいなあとも思っちゃうからさ。

何かというとそれは、25日のクリスマスに、マイケル・ジョイントとデートをすること！

キヤーーーって叫んじゃうでしょ？ねえねえ。

もう本当に嬉しそうで、誘われたときは思わず飛び上がっちゃったくらい。

あのマイケルとデート。天国に昇るくらい幸せなことなんだから。数学とスペイン語で同じクラスのあのマイケルと。かつこよすぎるあのマイケルと。

みんなの憧れ、あのマイケルと。本当にもう夢みたい。

もちろん夢なら覚めないでほしいけど、幸運なことに夢じゃない、現実。

夢の中で、デートに誘つてくれたマイケルが次の瞬間ジエニファ先生になつて、

「That's right!...」って誰でも何でも指差しながらスキップし始めることはない。

ジエニファ先生のスキップつてある意味、恐ろしいんだもの。まるで、羽生えた四本足のたこが踊っているみたいに見えるの。驚きものでしょ？

とにかくすゞぐくぐく楽しみ。こんなにも幸せなことが重なつたクリスマスなんて始めて。

クリスマスおかしな失敗は決してしないように、それプラス上手くいけばキスまでいけるかも知れない。

すごく楽しみなんだけど少し悩んじゃうことが。デートに着ていく服をどうするか、っていうこと。

普段の私の服装は、ジーパンとかショーパンにTシャツやチコニッタクっていう格好。

基本的ラフな感じなんだけど、デートのときくらい女の子っぽい可愛らしい服装にするべきなのか、いつもどおりの格好で自分をアピールしたほうがいいのか。そんじょそちらの子らとは違いますよつて。そこらへんで悩んでいるわけ。

それに他にも、デートでのマナーは？トイレ行きたくなつたりどうすればいい？

オナラしたくなつたら？映画の途中でお腹が鳴つちやつたら？はしゃぐべき？おしとやかにするべき？

もう疑問ばかりで、クエスチョンマークばかりが頭の中をぐるぐる回っている。

だからこそ、今日は強力な助つ人を呼ぶことにしたの。強力？もしかしたら凶力かもだけど。

それは、いつも一緒にいる、アシュレイとリアン。あつ、言つておくけれどちなみにリアンは男ね。

女みたいな名前でよく間違えられるけど。本人もそれを気にしている様子。

僕は世界で一番ツイてない名前をつけられた奴だよつていつも嘆いでる。

その一人とは、学校に入つてから科学の授業で仲良くなつた。だつて科学のジル先生の肌つたら、授業をやるたびにしなびていってる気がするんだもの。

それで私は準備室においてあるカエルとかねずみとか蛇のホルマリン漬け達に、

栄養を吸い取られてるんじゃないかつて推測してたの。

で、同じ格好で同じ推測で、不気味なホルマリン漬けたちがハリを取り戻してゐるんじゃないかつて  
毎時間見張つてゐるのが3人もいたら、お互い自然と仲良くなるのが普通つてわけ。

そんな二人はお世辞にも恋愛経験豊富つてわけじゃないけど、アシュレイは女の子だからオシャレ方面のことで頼りになるし、リアンは男子だからね。結論、各性別の意見を聞こうと思つたつてわけ。まあ、少しばかり役に立つアドバイスを言つてくれると思うつし。クリスマスの飾りつけも自慢したいし。

早く来てくれないかな。もう本当に今は気分が絶好調。

そう思いながらアンバーが朝食の後片付けをしていると、ピンポンとチャイムが鳴つた。

玄関の扉の向こうからクスクスク、ゲラゲラ、ワッハッハと笑う声がする。

つまりアシュレイとリアンが来たつてことだ。家に来るときほいつもそう。

大きな文字盤の時計の前を通りて玄関に行き、茶色い木に金色の真鍮の取つ手に手を置いて、

静かに扉を押した。誰もいない。目の前の灰色の廊下は入つ子一人としていない。

だがこんなことにはもう慣れっこ。どうせ・・・・

「いつたあーいて、足ぶつた!」

「僕はおでこだよ、アシュレイの手のせいだ」

「うーるさいなあ。男なんでしょ我慢しなよ」

「男だったら痛がつたらいけないわけ?」

「そのとーり」

ギヤーギヤーギヤーギヤー、やっぱりだ。アシュレイ、リアンのおばかコンビは扉の裏に隠れていて驚かせるつもりだつたらしい。

あれつ誰もいない、何で？まさかお化け？・・・キャーが狙いだつたらしいけど、

アシュレイとリアンの手はもう読めてる。だから叫び声を発する代わりに扉を思いつきり押してやった。

そしたら扉がアシュレイとリアンの手やりおでこやひざひを直撃、というわけだ。

おでこや足をわすりながら、アシュレイとリアンはわらわらと勝手に家に入つていった。

リビングに入ると、白いマフラーをほどきながらアシュレイが口を開いた。

「全くアンバーつたらさあ。あんなに強く押さなくでも」

「あんなところに籠れてるあんたらがいけないんでしょ」

「でも、あれば僕のアイデアじゃなかつた、アシュレイのだ。それなのに道連れとはねえ」

「はあ、何言つてんの？あんたが一ヤニヤ笑いながら思ついたことでしょ」

「違うね、アシュレイのだ」

「つづん、リアンちゃんの！」

「ちょっと一リアンちゃんなんてやめろよな。僕は男だ、れつきとした」

「あらまあ、ゴメンね！つづく女の子だと思つちやつた一弱々しい名前せい」

「なんだつて！？」

「何よ？」

「もづ、スト-----ーップ！――」

両手を開いて一人の間に割つて入つた。その左右でこりみ合つてい

る一人。いつもの光景だ。

世界が終わるまで続きそうなプチ口喧嘩を止めるのはいつも私。

全くめんどくさいへんなる。喧嘩してもういために呼んだわけじゃないのに。

それに今私の気分は南国フルーツより甘酸っぱいんだから、その気分を台無しにしないでよね。

つぐづぐ、本当にこの一人を呼んでよかつたのだろうかと不安になる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7948o/>

---

クリスマスの魔法

2010年11月22日11時54分発行